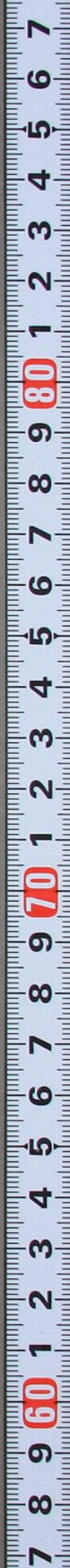


土佐日記解

草稿

下



土佐日記解下



○十七日とまねのちをたてあつてあつてきしはくもくもく
ろくろくちをむきつてしをゆく。

あつてきしはくもくもく曉月也トキキツクあつてきしはくもくもく
萬葉集十にきしはくもくもく曉月夜もくもく子もくもく
あつてきしはくもくもく又ら任知集にあつてきしはくもくもく
あつてきしはくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

○これあつてきしはくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
あつてきしはくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

○うらぬまの船をいふ海のうられをいふとまをいふと
くまをいふとまをいふとまをいふと

をいふとまをいふとまをいふとまをいふと
浸すといふ ○いかにのよめこい 賈島をいふとまをいふと
漢隱
叢話前集卷十九引今是堂手録云高麗使過海有詩
云水鳥浮還没山雲斷復連時賈島詐為梢人聯下
句云棹穿波底月船壓水天麗使嘉歎久之自此不
復言詩云この詩をいふとまをいふと ○まをいふとまをいふと
まをいふとまをいふとまをいふとまをいふと
まをいふとまをいふとまをいふとまをいふと

○まをいふとまをいふと

まをいふとまをいふとまをいふとまをいふと
まをいふとまをいふとまをいふとまをいふと

水に沈む月ありうらうら船をいふとまをいふと
すそ月中に桂ありとまをいふと ○月桂を詠林采
葉抄引兼名苑云月中桂長二百五十丈月輪内有之
下有河此木秋花開云云 酉陽雜俎云月桂五百
丈下有一人常斫之とまをいふと

○まをいふとまをいふと

まをいふとまをいふとまをいふとまをいふと

○ふむはなましつひたさぬ人のいふまじき。

男どもを船中の男共ヲトコトナといふ。ありしころもいふまじき
に同。次文「はなましつひたさぬ」は「なましつひたさぬ」に船は
長ツナしける道ミチあるに合せていふなり。○心やりを
心を遣ヤりは「守はる」ナカサの事。○萬葉集に思ひやりと
よめる同。○いふなりは「磯」に觸る波とつゝ相模國
風土記云鎌倉郡見越崎每有速浪崗石圍人名号
伊曾布利謂振石也。いふなりは「磯」に觸る波とつゝ相模の事
て碎ツクラる磯イソにを射イるなり。守はるの事。○はなましつひたさぬ
まじきまぬ人の歌なりと也。惠慶集にいふなりとあり。

はなましつひたさぬ人のいふまじき。

○まじきまぬ人のいふまじき。

はなましつひたさぬ人のいふまじき。まじきまぬ人のいふまじき。まじき
まぬ人のいふまじき。まじきまぬ人のいふまじき。まじきまぬ人のいふまじき。
まじきまぬ人のいふまじき。まじきまぬ人のいふまじき。まじきまぬ人のいふまじき。
まじきまぬ人のいふまじき。まじきまぬ人のいふまじき。まじきまぬ人のいふまじき。
まじきまぬ人のいふまじき。まじきまぬ人のいふまじき。まじきまぬ人のいふまじき。
まじきまぬ人のいふまじき。まじきまぬ人のいふまじき。まじきまぬ人のいふまじき。

○まじきまぬ人のいふまじき。
○まじきまぬ人のいふまじき。
○まじきまぬ人のいふまじき。

○ちぢりゆきぬしむの事いふはなほいふに似たり

〓

船の最ササへけゑるをよ文に船最ササへけゑるは同し

て佐氏ササの事也 ○ちぢりゆきぬしむの事いふに似たり

に似たりゆきぬしむの事いふに似たり

ゆきぬしむの事いふに似たり

○ちぢりゆきぬしむの事いふに似たり

ゆきぬしむの事いふに似たり

ゆきぬしむの事いふに似たり

ゆきぬしむの事いふに似たり

〓

○ちぢりゆきぬしむの事いふに似たり

ゆきぬしむの事いふに似たり

ゆきぬしむの事いふに似たり

ゆきぬしむの事いふに似たり

ゆきぬしむの事いふに似たり

ゆきぬしむの事いふに似たり

ゆきぬしむの事いふに似たり

十七日ありてちぢりゆきぬしむの事いふに似たり

歌林良材に二條院讃岐

はる船は... 今其母のめ... 只... 假令... 文に書... 度... 源氏... 指... 手... 度... 源氏... 指... 手... 度... 源氏... 指... 手...

○十九日

はる船は... 今其母のめ... 只... 假令... 文に書... 度... 源氏... 指... 手... 度... 源氏... 指... 手...

○十九日... 是日... 船... 指... 手... 度... 源氏... 指... 手...

はる船は... 今其母のめ... 只... 假令... 文に書... 度... 源氏... 指... 手... 度... 源氏... 指... 手...

○十九日... 是日... 船... 指... 手... 度... 源氏... 指... 手...

○十九日... 是日... 船... 指... 手... 度... 源氏... 指... 手...

○十九日... 是日... 船... 指... 手... 度... 源氏... 指... 手...

○十九日... 是日... 船... 指... 手... 度... 源氏... 指... 手...

○十九日... 是日... 船... 指... 手... 度... 源氏... 指... 手...

○十九日... 是日... 船... 指... 手... 度... 源氏... 指... 手...

○十九日... 是日... 船... 指... 手... 度... 源氏... 指... 手...

○十九日... 是日... 船... 指... 手... 度... 源氏... 指... 手...

○（漢文） 唐使の来朝に當りて其の儀を記す

○（漢文） 唐使の来朝に當りて其の儀を記す

○（漢文） 唐使の来朝に當りて其の儀を記す

○（漢文） 唐使の来朝に當りて其の儀を記す

○（漢文） 唐使の来朝に當りて其の儀を記す

○（漢文） 唐使の来朝に當りて其の儀を記す

○（漢文） 唐使の来朝に當りて其の儀を記す

○（漢文） 唐使の来朝に當りて其の儀を記す

○（漢文） 唐使の来朝に當りて其の儀を記す

○（漢文） 唐使の来朝に當りて其の儀を記す

安倍仲麻呂の安部氏を、姓氏録に孝元天皇の子
大彦命之後也と云ふ。人の父祖物に云ふ守。續日本
紀を考るに、元正天皇、靈龜二年六月遣唐使の勅
ありて、養老元年三月多治比真人縣守おを始て、四
の船艦して同二年十二月に帰朝せり。同紀に留學生
の事あり。其の舊唐書列傳卷二百四十九上東夷傳
云、開元初又遣使来朝。其偏使朝臣仲滿慕中國之風
因留不去。其後唐使の来朝に當りて、其の儀を記す。
三年、藤原清河遣唐使の時、其使の帰りに従ひて歸る。

とて一に風波をあらたて又彼地へ吹けりて在しは安
祿山の乱より帰朝の事とせざりしにや終るの土
ほて身まうりしもの。○いづれのうきふを古今集の歌に
左注にみゆりしとみゆれば海邊にとも。明州を元和郡縣圖
志卷廿六云。明州開元二十六年採訪使齊澣奏。分越州
之鄞縣置明州以境内四門山為名と云。うづれは
送別の詩あり。王維色借きの詩にゆれり其れはあり
しもの。

○あつぎを不足也遠き別をいひはあつぎを月あつ
ぎを海をいひはあつぎをいひはあつぎをいひはあつぎを
いひはあつぎをいひはあつぎをいひはあつぎをいひはあつぎを

あつぎを不足也遠き別をいひはあつぎを月あつ
ぎを海をいひはあつぎをいひはあつぎをいひはあつぎをいひはあつぎを

まはあつぎ也。○神をいひはあつぎを神をいひはあつぎ也。古く
を賜と云ふ。いひはあつぎと云ふ。萬葉集をいひはあつぎ
をいひはあつぎ也。○神をいひはあつぎを古事記日本紀をいひはあつぎ
をいひはあつぎ也。

○あつぎを不足也遠き別をいひはあつぎを月あつ
ぎを海をいひはあつぎをいひはあつぎをいひはあつぎをいひはあつぎを

あら海原。青^{アラ}と湛^{タビ}る海水の色をよみ。原ハ平^{ヒラ}と同語に
 て。平^{ヒラ}のに唐^{カラ}きみとよみ。野原^{ノハラ}まゝ人の腹^{ハラ}まのぼろも是
 と同じ。契^チ沖^{ウチ}ら。古今集にはまの原^{ノハラ}とて載^カれしう。
 天の原^{アメノハラ}青海原^{アヲノハラ}とよみ。やうにいつ傳^ツへしるを。海上^{ウミノウチ}されあを
 海^{ウミ}原^{ハラ}の方^{カタ}をこれしやとつくまはしたるものなり。うら
 とけハ振^{フリ}放^{ハナ}にして。頭^{カビ}を向^ムて海^{ウミ}を見^ミ放^{ハナ}るを云^{イハ}。振^{フリ}ハうらへる
 うらへるこきませし。いさううらうきこきまのやうな詞^{コト}に
 て強^{ツヨク}くつる發^{ツキ}語^{コト}なり。○月^{ツキ}のハ月^{ツキ}敷^カとよみ。こきまのうらうら
 うらうらに歎^{ナゲ}息^イのこきまのうらうら。うらうらを海上^{ウミノウチ}とよみ
 せば東^{ヒガシ}の海^{ウミ}うら月^{ツキ}をあゆむ。は月^{ツキ}をうらうら國^{クニ}なる。春^{ハル}日の三^ミ笠^{カサ}

うらうら月^{ツキ}のうらうら國^{クニ}を歸^{カエ}るしうすうらうら月^{ツキ}のうらうら
 うらうら月^{ツキ}のうらうら國^{クニ}のこきま。仲^{ナカ}誓^{チカ}をな良^{ヨシ}代^ト京^{キョウ}の人
 ぢれハ月^{ツキ}をうらうら國^{クニ}のこきまのうらうら。うらうら月^{ツキ}のうらうら
 万^{マン}葉^{エフ}集^{シュ}七^{シチ}春^{ハル}日^{ニチ}在三^{サン}笠^{カサ}山^{ヤマ}。月^{ツキ}此^{ココ}般^{パン}のうらうら。同^{ドウ}十^{ジュウ}に春^{ハル}日^{ニチ}在^ニ
 三^{サン}笠^{カサ}乃^ノ山^{ヤマ}今^{イマ}月^{ツキ}のうらうら。うらうら月^{ツキ}のうらうら。皆^{みな}奈^ナ良^ラの代^ト此^{ココ}れ
 あり。同^{ドウ}十八^{ジュウハチ}に月^{ツキ}のうらうら。うらうら月^{ツキ}のうらうら。うらうら月^{ツキ}のうらうら
 うらうら月^{ツキ}のうらうら。文^{フミ}選^{セン}月^{ツキ}賦^フに。隔^ヒ子^コ里^リ今^{イマ}共^ニ明^{メイ}月^{ツキ}とよみ。やう
 うらうら月^{ツキ}のうらうら。うらうら月^{ツキ}のうらうら。うらうら月^{ツキ}のうらうら。うらうら月^{ツキ}のうらうら。

○
 うらうら月^{ツキ}のうらうら。うらうら月^{ツキ}のうらうら。うらうら月^{ツキ}のうらうら。うらうら月^{ツキ}のうらうら。

○ かなづかひのふしをわきまへしむるは、
あはれける。

漢字は筆画の多きより女文より假字の
たもつて、
○ 漢文に書きて、
譯者の事あるは、
の席にせしめ居るもあらず。又別
に、
仲麻呂の通事なること、
あらず。

○ 漢文の書きて、
あらず。

よき事なり。漢文の書きて、
あらず。

○ 漢文の書きて、
あらず。

このころ、仲麻呂は書原にありし時、
昔の遠近に、
指て當時の事なり。

○ 源氏若菜上の花は...

今俚言に... 和泉式阿日花... 源氏若菜上の花... 榮花... 花...

○ 源氏若菜上の花は...

源氏若菜上の花は... 上の花は... 船の花は...

○ 源氏若菜上の花は...

○ 月運、舟行岸移ハ云々 唐曹松ハ詩曰掬水疑山動揚帆覓岸行ハとありし如し

○ ちぢるゆゑのりるねがあらはなるとおもはれしはし

○ ちぢるゆゑのりるねがあらはなるとおもはれしはし

○ ちぢるゆゑのりるねがあらはなるとおもはれしはし

○ ちぢるゆゑのりるねがあらはなるとおもはれしはし

○ ちけを散アキラケテ而にも汐とまに浪の散チリミ乱るチリミをふく神代
純スチテマツテに乃散去矣アテテ神代純アテテに散アテテ卒アテテあやま散アテテに回アテテし霞アテテと
あけともあけほはる意又踏歌とあははらすと
あけともあけほはる意又踏歌とあははらすと

○ ちぢるゆゑのりるねがあらはなるとおもはれしはし

○ば、おひらきつかさたるいす。

あつらへりしものゝつゝおのむかひのまはしるるなり。○すむ
「恐也。古今集序に、つゝもの事にあたり、つゝ、坂捨建集
神存、つゝのまはしるるむけは、新のむらもあられ、春のむらも
あ、あつらへりしものゝつゝおのむかひのまはしるるなり。

○廿四日、あつらひのいすつかさたるいす。

あつらひのいすつかさたるいす。按、つゝのり
廿九のまはしるるむら、地名もいすをばあひむ、沖中に
あつらひとあつらひのり。つゝのり。

○廿五日、あつらひのいすつかさたるいす。北風。船は、あつらひのいす。

おひらきつかさたるいす。

和名抄云、櫛師文選、呉菟賦云、櫛工、櫛師。和名加、とあつこれ

なり。○あつらひのいす。追く也。つゝのり。あつらひのいす。あつらひの

足けぬや、に思ふも、知れ受る付、つゝのり。とあつらひのいす。

○海賊の追来。つゝのり。あつらひのいす。あつらひのいす也。

○廿一日、あつらひのいすつかさたるいす。

あつらひのいすつかさたるいす。あつらひのいす。あつらひのいす。あつらひのいす。

海賊の事。ちつゝのり。あつらひのいす。あつらひのいす。あつらひのいす。

あつらひのいす。あつらひのいす也。○あつらひのいす。道のゆに、あつらひのいす。

あつらひのいす。あつらひのいす也。陸地もあつらひのいす。

船路に... 萬葉集九に... 又一に... 船人の... 〇あまは海... 船人の...

〇か... 〇あまは海... 船人の...

幣に... 幣に...

細に切て袋... 拾遺集雜上に... 源氏若菜上に... 禱布佐に... 神に手向る物... 好麻所生... 今爲上總下總二國是也... 麻も... 好麻所生... 今爲上總下總二國是也...

ちりり申してさるやうき帯は敷うさるぬ連^{スミヤ}に
あつゝあつゝとすに帯さるのまゝ、東は方へちりけりと
いふ也。然^サとて神へ東へちりばゝるもあはれ例ある隔
ちり文體なる。又撰師の申してさるゝばゝるゝとて又さ
るゝとて申してさるゝとてさるゝとてさるゝとてさるゝと
てさるゝとてさるゝとてさるゝとてさるゝとてさるゝと

○ちりり申してさるやうき帯は敷うさるぬ連に

ちりり申してさるやうき帯は敷うさるぬ連に
ちりり申してさるやうき帯は敷うさるぬ連に

ちりり申してさるやうき帯は敷うさるぬ連に
ちりり申してさるやうき帯は敷うさるぬ連に

書紀三ノカノ度事神戸神詞ノ次因曰自此莫過即投其杖其謂政神此云布柳手能加做トアリ
道邊祭祝詞ニ八俣比在八俣比賣久那手止佛名者申上ト久那手即此神ニ八俣比在八俣比賣ハ古事記ニ云謂道邊神書紀ニ
コノ神名ヲソコノ決置置ルキニ
コノ神ヲ道祖神ト云ク亦名
抄ニ道祖佐信乃地差ト
アリコノ佐信乃地差トハカ
祝詞ニ陽津鏡村之娘久塞
トアル事ニ塞神ト云後
ニ神ト云ルハ此也矣邦
ニ行祓神ヲ祖ト云ルモ
テカケルニコノ事ニ塞ト云ラス

立船戸神 ^{この神を書記にハ}又道之長乳歯神 ^{ミチノカサハ}
限にえあぶ。船とえゆきあつと云。袖中抄十九
ゆゝゆゝとゆゝゆゝとゆゝゆゝとゆゝゆゝとゆゝゆゝとゆゝゆゝと
わいめおひんとき。帯の東へちりり。都に飛出ぬまれば。
うゝゝゝとて。ちりり申してさるやうき帯は敷うさるぬ連に
しに。帯の東へちりり。都に飛出ぬまれば。ちりり申してさるやうき帯は敷うさるぬ連に
まゝまゝとて。ちりり申してさるやうき帯は敷うさるぬ連に。ちりり申してさるやうき帯は敷うさるぬ連に
ちりり申してさるやうき帯は敷うさるぬ連に。ちりり申してさるやうき帯は敷うさるぬ連に。ちりり申してさるやうき帯は敷うさるぬ連に
ちりり申してさるやうき帯は敷うさるぬ連に。ちりり申してさるやうき帯は敷うさるぬ連に。ちりり申してさるやうき帯は敷うさるぬ連に
ちりり申してさるやうき帯は敷うさるぬ連に。ちりり申してさるやうき帯は敷うさるぬ連に。ちりり申してさるやうき帯は敷うさるぬ連に


~~~~~ 悲懼畏あ~~~~~ 恐~~~~~ 持  
~~~~~ 恐~~~~~ 恐~~~~~ 恐~~~~~ 恐~~~~~  
~~~~~ 歎~~~~~ 歎~~~~~ 歎~~~~~ 歎~~~~~

○~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

○~~~~~ 望日都遠~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~ 晋書  
明帝紀に擧目則見日不見長安とあるに~~~~~

○~~~~~
~~~~~  
~~~~~

○~~~~~
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

○ふしの風やまをぞしきまはた あはれ

しきまはた あはれ 源氏空蟬に あはれ 晴蛉日記 あはれ 源氏空蟬に あはれ 晴蛉日記 あはれ

○あはれよす あはれ 雨やまをけ あはれ

け あはれ 雨やまをけ あはれ 源氏空蟬に あはれ 晴蛉日記 あはれ 源氏空蟬に あはれ 晴蛉日記 あはれ

○あはれ船 あはれ 雨やまをけ あはれ

○とあ あはれ 雨やまをけ あはれ 源氏空蟬に あはれ 晴蛉日記 あはれ 源氏空蟬に あはれ 晴蛉日記 あはれ

○あはれ あはれ 雨やまをけ あはれ 源氏空蟬に あはれ 晴蛉日記 あはれ 源氏空蟬に あはれ 晴蛉日記 あはれ

○あはれ あはれ 雨やまをけ あはれ 源氏空蟬に あはれ 晴蛉日記 あはれ 源氏空蟬に あはれ 晴蛉日記 あはれ

日除手甲、寅、日除足甲為吉、又云寅、日三尺、淋、兩手指
甲午、日三尺、淋、兩足、盡去、兩足指甲、云々云々云々、子
日、九、き、る、日、あ、く、す、時、代、こ、く、な、き、も、の、う、れ、つ、る、人、に、
ま、く、も、陰、陽、家、の、説、に、ま、く、は、け、り、の、う、れ、つ、る、ま、く、も、
○ち、き、ま、り、し、が、あ、れ、子、の、を、め、の、い、し、く、少、知、り、う、れ、と

つと、海の中あれが、か、く、う、し、

子日遊、き、つ、の、代、に、初、ま、り、く、ん、ど、つ、の、あ、く、す、公、事、振、原、云、
是、を、あ、か、く、野、に、あ、く、す、す、く、す、く、松、を、け、る、る、り、
朱雀院、圓融院、三条院、ま、り、の、時、に、い、の、師、遊、ま、り、
ける、に、い、子、の、を、め、く、せ、け、く、を、寬、和、元、年、二、月、十、三、日

の事也 下界ともある のい、に、く、の、初、を、つ、く、今、は、く、案
に、い、く、の、い、く、く、く、扶、桑、略、記、宇、多、天、皇、寬、平、八
年、の、条、に、閏、正、月、六、日、有、子、日、宴、行、北、野、雲、林、院、云、い、
時、菅、原、の、大、臣、も、あ、り、に、や、菅、家、文、草、に、扈、從、雲
林、院、不、勝、感、歎、聊、叙、所、觀、序、云、予、亦、嘗、聞、于、故、老、曰、
上、陽、子、日、野、遊、歎、老、其、事、如、何、其、義、如、何、倚、松、樹、
以、摩、腰、習、風、霜、之、難、犯、也、和、菜、羹、而、啜、口、期、氣、味、之、克、
調、也、く、く、く、初、り、な、ま、く、ま、く、く、子、の、を、め、く、五、の、初、ね、に、
十、七、日、も、子、の、を、め、く、松、を、け、る、り、く、く、く、か、あ、か、九、に、
は、く、く、く、く、五、日、の、風、波、あ、ま、く、く、く、く、く、く、く、く、

はるのこさうしよふのたんとるの浦に
春日野のなるれいよ兼も指すとも也古今集に
のよきまじりしよふていしよふよふまはりしよふ
はるちのちよふよふよふよふよふよふよふよふ
よふよふよふよふよふよふよふよふよふよふ

○かゝりて浦にへ、あまらまらまらまらまらまらまら
うことたひなれ、たのみの浦とぞいふは

とこの浦、昔今云阿波の鳴門に近き所ありと
次のつきこ、阿波の水門、ゆまゝ泉國とていふゆ
ともありよし

○あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
けりしよふしよふしよふしよふしよふしよふしよふしよふ
しよふしよふしよふしよふしよふしよふしよふしよふしよふ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

おたとしよふしよふしよふしよふしよふしよふしよふしよふしよふ
ららららららの圃れお佐郡お佐御ふにけしん女の
々京上歸んしよふしよふしよふしよふしよふしよふしよふしよふしよふ
紀氏お従類ぢよばまらららららららららららららららららららら
也 ○名よしよふしよふしよふしよふしよふしよふしよふしよふしよふ
お佐郷のお佐と、お佐流のお佐と名の

そのぬきごころの條に、
いづれを虧かぬや。

○今所記の諸品は、
新編に記すに、
○に風浪にまかせ、

そのぬきごころの條に、
いづれを虧かぬや。

○泉州志に、
日根郡黒崎、
在淡輪村。今黒崎と呼り

今二色を言の如く、
籮芳に於て、
一諸本すは、
うに於てとあるや。○す、
私名物曰籮芳、
俗音、
須方、
人用、
赤色也、
一色、
すは、
青黄赤白黒の五色に、
黄の、
一色、
すは、
也。

○これあひだに、
ゆがひ、
ま、
は、
泉州志に、
日根郡箱作村、
○

あそむていづれか、下白は、いづの卒言めき、あそ
むる也。○いづれか、辛苦しもの也。○ひねり
こそ、上文に、あそむあそむいづれか、○あそむ
あそむを、いづれか、也。諸説とも、強言なりといふ
いづれか、言、いづれか、あそむは、類従本に、あそ
むる、誤り。○いづれか、いづれか、諸抄に改め
るも、あそむる。一、万葉集五に、堅塩子取都豆之呂比ま
新撰字鏡に、醜左加奈豆志留源氏、常木に、
いづれか、江家次第七に、豆志呂比、而、あそむ、皆同語に
て、物を數ふに、一つ二つ、萬つ、あそむ、都と重ねるに、

衣と綴る糸と、續々、あそむ、つと、回ごと、にて、切れ、きると
一つに、寄集、あそむ、いづれか、あそむ、あそむ、あそむ、
と、あそむ、いづれか、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、
あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、
あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、

○二日、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、
あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、
あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、

○あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、
あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、
あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、
あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、
あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、あそむ、


~~~~~

~~~~~皆上文にてもつて也。昔の歌

を紀氏を記すを紀氏にうつりての事也。○~~~~~

その事と云ふ事也。万葉五に シラカハ 白王之吾子 コノヒト 古日若と

云ふ事也。その事と云ふ事也。忘貝拾ひて云ふ事也

~~~~~

~~~~~○~~~~~

~~~~~也。

○~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~  
昔に

○~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~  
水

~~~~~  
下

リ、今の俗に水に物を漬るをひたるといふ此俗也、そのこと  
を、<sup>ヒテ</sup>浸て水の清りたるまねに、その名のなる國々  
汲とハ、ちとていふ、ちとていふと也、國の名は和泉を  
泉にとりていふ也。

○五日けい... 小津 泊 和泉の...  
和泉の...  
の和泉、

く、辛苦して和泉の灘... 灘ハ速吸名  
門の名門と曰語に、波門の意なり。○小津の

再考、の小津と雄水門として、上には黒崎はこの地なり、  
乃神社二座アリ、男子地あり、今も名残り、大津と云地假名と云、  
の社と和泉國を内帳、男子止社と也、

泊、日本紀神武天皇の巻なる雄水門にて、和名抄に和  
泉國日根郡呼喚ま、神名式に男神社二座とあり、  
和泉郡太津と云、小津にて地理と合ふ、○  
と和泉此途、ちとていふ言也、  
と和泉此途、ちとていふ言也、  
長きことと合ふ、一万余十二、  
有績麻成長門の浦に、  
之宮尔、

はねをまわす。綾麻のそぎ、少津の如きつれ也。

○かゝるは... ちるは...

めのもはを催促す也。○ふぶを賜ふ也。上文より... 活る

○朝の宮北風也。万葉に朝東風とある也。

○ちま... ちま...

○ちま... ちま...

万葉に... 又十に... 神代... 万葉の注釈... 例にや人のあやしく... 三十一

てんてんてん

○かたはら... 風... ち... 波... 勿... 勿思吾妹... 今... 和名抄... 鷗唐韻云... 水鳥也兼名苑云一名江鷗とあり万葉一に加萬目とあり

あり万葉一に加萬目とあり... 石津... 夫木抄十九に... 無文の義... 古今集三に... 新... 七

石津... 夫木抄十九に... 無文の義... 古今集三に... 新... 七

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a diary.

更級 石津の船に載りて  
和泉國 石津と

和泉國  
石津と

○ 手紙の文は...  
Handwritten text in a cursive script, starting with a circled 'O'.

○ 手紙の文は...  
Handwritten text in a cursive script, starting with a circled 'O'.

石津

石津の古名也。のれ古今六帖に載り、  
和名抄云、和泉國大鳥郡石津、  
石津太社神社、  
今も上石津下石津と云所あり、  
拱津國に近き也。

○石津の古名也。のれ古今六帖に載り、  
和名抄云、和泉國大鳥郡石津、  
石津太社神社、  
今も上石津下石津と云所あり、  
拱津國に近き也。

○石津の古名也。のれ古今六帖に載り、  
和名抄云、和泉國大鳥郡石津、  
石津太社神社、  
今も上石津下石津と云所あり、  
拱津國に近き也。

石津の古名也。のれ古今六帖に載り、  
和名抄云、和泉國大鳥郡石津、  
石津太社神社、  
今も上石津下石津と云所あり、  
拱津國に近き也。

○石津の古名也。のれ古今六帖に載り、  
和名抄云、和泉國大鳥郡石津、  
石津太社神社、  
今も上石津下石津と云所あり、  
拱津國に近き也。

石津の古名也。のれ古今六帖に載り、  
和名抄云、和泉國大鳥郡石津、  
石津太社神社、  
今も上石津下石津と云所あり、  
拱津國に近き也。



子ゆゑとてしるす也。○女はしるす之、和名抄云  
 萱草兼名苑云萱草一名忘憂漢語抄云和須礼  
久佐佑云如環藻  
二音文選祗叔夜養生論云合歡久忘憂  
 愚智所共知也云古今集に可しるす法云  
 是るもむしる人かむしるもむしるもむしる  
 能くしるもむしるもむしるもむしるもむしる  
 験あり也正揚しるす也。○むしるす  
 暇る文章にむしるすもむしるすもむしるすも  
 〇むしるすもむしるすもむしるすもむしるすもむしるすも  
 〇むしるすもむしるすもむしるすもむしるすもむしるすも

かしらばも全ら忘果しるすもむしるすもむしるすも  
 んむしるすもむしるすもむしるすもむしるすも  
 んむしるすもむしるすもむしるすもむしるすも  
 んむしるすもむしるすもむしるすもむしるすも  
 んむしるすもむしるすもむしるすもむしるすも  
 んむしるすもむしるすもむしるすもむしるすも  
 〇むしるすもむしるすもむしるすもむしるすもむしるすも  
 んむしるすもむしるすもむしるすもむしるすも  
 んむしるすもむしるすもむしるすもむしるすも  
 んむしるすもむしるすもむしるすもむしるすも

〇むしるすもむしるすもむしるすもむしるすもむしるすも  
 んむしるすもむしるすもむしるすもむしるすも  
オホフネヲアルニニコキテヤ  
 大船予荒海尔擗出八

船多氣まゝ、皇極純童謡に、岩のうゝ小猿こゝや  
こゝろも多礎底騰哀囉柶うままのふら「せむを考  
るに、ハ、手<sup>テ</sup>上<sup>アゲ</sup>の意なれ、手<sup>テ</sup>も引揚<sup>ヒキアゲ</sup>るも、肩<sup>カダ</sup>にうつ  
ぐるも、いける也、いけるも、轉<sup>マヒ</sup>るも、いけるも、いけるも、  
物を運ぶ事なり、いふも、繩<sup>ヒト</sup>あをも、拷<sup>シ</sup>るも、いけるも、  
吐<sup>ハク</sup>したぐりも、いけるも、いけるも、いけるも、いけるも、  
に多氣婆奴礼多香根者長寸まゝ、古麻波多具寺  
毛まゝ、馬太伎由吉氏、いけるも、皆右の也、いけるも  
荒波<sup>アラナヒ</sup>いけるも、覆<sup>フク</sup>るも、いけるも、船<sup>フネ</sup>も、棹<sup>ササ</sup>に、いけるも、  
するも、也、まゝ、船の舳<sup>シラ</sup>も、多藝斯<sup>タギシ</sup>も、手<sup>テ</sup>上<sup>アゲ</sup>る物なり、ハ

也古事記中卷に、成當藝斯<sup>タギシ</sup>も、いけるも、和名抄云舳唐  
舳<sup>シラ</sup>曰舳<sup>シラ</sup> 徒可反上声之 重字亦作舳 正船木也揚氏漢語抄曰柶 舳尾也 或作柶  
和語多伊之今案無人 呼<sup>ヒ</sup>挾抄<sup>キヤク</sup>為舳<sup>シラ</sup>師<sup>シ</sup>是<sup>シ</sup> いけるも多伊之を 藝<sup>キ</sup>を言使<sup>ト</sup>伊<sup>ト</sup>  
いけるも、いけるも、いけるも、○ちりへ、いけるも、いけるも、  
いけるも、船の退<sup>ヒ</sup>るも、いけるも、源氏常木に、いけるも、いけるも、  
いけるも、いけるも、いけるも、○ほ、いけるも、いけるも、  
いけるも、其<sup>コノ</sup>近<sup>チカ</sup>き、邊<sup>ヘ</sup>りまゝ、至<sup>キ</sup>る意也、万葉集十五に、保<sup>ホ</sup>等<sup>ト</sup>  
保<sup>ホ</sup>等<sup>ト</sup>死<sup>シ</sup>き、いけるも、いけるも、死<sup>シ</sup>ぬ邊<sup>ヘ</sup>りまゝ、至<sup>キ</sup>りつれ、危<sup>キ</sup>く死<sup>シ</sup>  
あゝりし也、同七に、殆<sup>キリシ</sup>之<sup>ノ</sup>國<sup>クニ</sup>手<sup>テ</sup>斧<sup>ノ</sup>所<sup>ト</sup>取<sup>リ</sup>ぬ、いけるも、手<sup>テ</sup>斧<sup>ノ</sup>  
取<sup>リ</sup>ぬ、いけるも、邊<sup>ヘ</sup>りまゝ、いけるも、危<sup>キ</sup>く、いけるも、いけるも、也、いけるも

船をうらはめんとする邊りまてに至りしと云々  
うらはめんとす也、然るは波のこもをかくりて、  
はらむもあらざるなり、けあ風よきとて、  
ひる船をあらせむ、はらむに、  
やとつとつと也、文勢いよく、雄しく、

○かぢりゆりゆりすゆりの明神を、れいめゆり、  
ほきまのそかぢりゆりゆり、

すゆりの明神を、古事記云、其底筒之男命、中筒  
之男命、上筒之男命、三柱神者、墨江之三前、大神也、こ  
内神名帳に、住吉郡住吉神座四座、  
並名神大月と載、  
次相宮新宮

る御社にて、今も現に拜し奉はる、み住吉をすこよ  
しとよめる、後の代に、  
やうとて萬葉集に、  
○明神をあきつらみとて、  
す称なる事を、  
に歌によめる、  
しるる、  
五年九月戌子奉幣、  
に嘉祥元年冬十一月壬申、  
例縁屢有靈驗也、



しほまきしきまきしきしき

生殿のまきを楫取又りしやう。ぬまに船君が御心りれ  
のまきまきしきまきしきまきしき。動もぬ也。神明神の權し  
受<sup>マ</sup>はまの<sup>マ</sup>常<sup>マ</sup>なるしきまきしき也。

○しきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしき  
あれまきしきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしき  
しきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしき

まきしきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしき  
まきしきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしき  
まきしきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしき  
まきしきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしき

いそまきしきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしき  
まきしきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしき  
まきしきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしき  
まきしきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしき  
まきしきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしき  
まきしきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしき  
まきしきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしき

○まきしきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしき  
まきしきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしき

まきしきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしき  
まきしきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしき  
まきしきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしき

まきしきまきしきまきしきまきしきまきしきまきしき



いてきめりいしつゝいさなり萬葉集二十におどいづみと  
 りおて宇都良宇都良<sup>ウツラ</sup>いさつていほしきまほいさつてい  
 とのめりも瞿麥の花をり持てるめく眼前<sup>メノマエ</sup>に居置<sup>スエオキ</sup>  
 帯にえまほいさつていさつていさつていさつていさつてい  
 さいりいさつていさつていさつていさつていさつていさつてい  
 にさほいさつていさつていさつていさつていさつていさつてい  
 りいさつていさつていさつていさつていさつていさつていさつてい  
 さいりいさつていさつていさつていさつていさつていさつてい  
 まさかろいさつていさつていさつていさつていさつていさつてい  
 こさつていさつていさつていさつていさつていさつていさつてい

○いさつていさつていさつていさつていさつていさつていさつてい  
 いりいさつていさつていさつていさつていさつていさつていさつてい  
 よろいさつていさつていさつていさつていさつていさつていさつてい

いさつていさつていさつていさつていさつていさつていさつてい  
 万葉集十二に水咫<sup>ミツツクシ</sup>衝石とありいさつていさつていさつてい  
 津<sup>ツ</sup>を天津<sup>アマノ</sup>神國津神<sup>カミ</sup>まゝの津<sup>ツ</sup>にて添<sup>ソ</sup>る詞<sup>コト</sup>あり串<sup>クシ</sup>ハ  
 する物<sup>モノ</sup>を刺<sup>サシ</sup>通<sup>トス</sup>そのをり梳<sup>カ</sup>ま<sup>ス</sup>布<sup>フ</sup>具<sup>グ</sup>之<sup>ノ</sup>をのりいさつていさつてい  
 一<sup>ニ</sup>意<sup>イ</sup>也<sup>ナリ</sup>いさつていさつてい水<sup>ミヅ</sup>の浅<sup>カシ</sup>深<sup>コシ</sup>を刺<sup>サシ</sup>貫<sup>ス</sup>て知<sup>チ</sup>そのりいさつていさつてい  
 川<sup>カハ</sup>尻<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>撰<sup>ヒ</sup>津<sup>ツ</sup>國<sup>クニ</sup>西<sup>ニ</sup>成<sup>ル</sup>郡<sup>ノ</sup>にて拾遺集別部の端書<sup>ハシカキ</sup>なり  
 帥<sup>サシ</sup>伊<sup>イ</sup>周<sup>シュ</sup>はくいさつていさつていさつていさつていさつていさつていさつてい

けるに...の...なり。○...の...  
 まはゆき物を拜するなり。ち...の...の光明を額  
 に...の...の...の...の...の...  
 ...の...の...の...の...の...  
 ...の...の...の...の...の...  
 ...の...の...の...の...の...  
 ...の...の...の...の...の...  
 ...の...の...の...の...の...  
 ...の...の...の...の...の...  
 ...の...の...の...の...の...

解するに...の...の...の...  
 ...の...の...の...の...の...  
 ...の...の...の...の...の...  
 ...の...の...の...の...の...  
 ...の...の...の...の...の...  
 ...の...の...の...の...の...  
 ...の...の...の...の...の...  
 ...の...の...の...の...の...  
 ...の...の...の...の...の...  
 ...の...の...の...の...の...  
 ...の...の...の...の...の...



ちとほえ。和名抄云若船 布奈夜 ともゆ。○毛非 妙壽院本に巨子とて。おほきとゆらいとて。音を便なり。○か〜のけとて。上文は月七日の條に。おほきとてゆらとてか〜とてしきとておほきとてか〜とて結ひ也。〜とてゆらとて〜

○イソカリケ ちとほえ。和名抄云若船 布奈夜 ともゆ。○毛非 妙壽院本に巨子とて。おほきとゆらいとて。音を便なり。○か〜のけとて。上文は月七日の條に。おほきとてゆらとてか〜とてしきとておほきとてか〜とて結ひ也。〜とてゆらとて〜

ちとほえ。和名抄云若船 布奈夜 ともゆ。○毛非 妙壽院本に巨子とて。おほきとゆらいとて。音を便なり。○か〜のけとて。上文は月七日の條に。おほきとてゆらとてか〜とてしきとておほきとてか〜とて結ひ也。〜とてゆらとて〜

ちとほえ。和名抄云若船 布奈夜 ともゆ。○毛非 妙壽院本に巨子とて。おほきとゆらいとて。音を便なり。○か〜のけとて。上文は月七日の條に。おほきとてゆらとてか〜とてしきとておほきとてか〜とて結ひ也。〜とてゆらとて〜



いづれにやまのいづれに水とばしとぬとあかともうひくふ  
部居ころを海上に恐る互に都ちつたりてはえ

誇るるよ。○か〜〜〜ひぬり〜〜〜もに上文にいつ

○なづい、万葉集四に煩ナラシ参来向マツまゝ七に我馬難ワレウマナシあ  
とよある如く滞り煩ふま也。一そのまを波谷を凌ぎカラ

く〜と来とま〜又川の堀の水が濁ると舟も行難  
〜もつと病に煩ふも也。一病をばが、舟も船も

わつめとにもある〜も也。

○せ〜〜〜の〜〜〜

わ〜〜〜船もあす〜は水の〜波のあ〜き  
な〜〜の〜〜な〜〜の〜〜な〜〜の〜〜  
に〜〜ず〜〜な〜〜

あ〜のあ〜ぬ〜の不足クワシ也。○なやますスナギ令悩也

生後と本意を按に。なづいを萎沈オエシヅム。なやまを萎悩オエナガ  
の暇後より。切〜とあづい〜の〜歌にさやますと

あ〜ら〜れ相近き語〜万葉集に〜  
な〜〜と〜あるを思ふ令〜と〜を別にさ〜

あ〜ら〜。一その〜を〜都〜の〜船と〜帰るまや  
ますま〜るに水の情の浅き〜也。

○あはるのこも巨子をらふ也。ごも伊勢の御出ぬの御あ  
とよめく。うづきまきしる也。物終に。御らとあ

うづき。本朝文粹第一に。菅贈大相國慰小男女  
詩云徒耽弹琴者。閻荅称弁御。注云。謂貴女為御蓋。  
取貴人女御之義也。○あはるのこも  
あはるのこも。はる物終文に。いづきまきしる也。  
詠ま。あはるのこも。あはるのこも。あはるのこも。  
人のあはるのこも。あはるのこも。あはるのこも。あはるのこも。

いづきまきしる也。○あはるのこも。あはるのこも。あはるのこも。  
あはるのこも。あはるのこも。あはるのこも。あはるのこも。

○あはるのこも。あはるのこも。あはるのこも。あはるのこも。  
あはるのこも。あはるのこも。あはるのこも。あはるのこも。

延喜左馬寮式に。摺津國鳥  
養牧。あはるのこも。あはるのこも。あはるのこも。  
魚をらふ。その返報に米を遣きしる也。



舟の騒ぐはてしなくあつてゐる。不鳴り  
 の水。○みゑる、勝行(サカノヨリ)の舟也。舟の騒ぐはてしなくあつてゐる。今せらる。

○此舟は、舟の騒ぐはてしなくあつてゐる。今せらる。

舟の騒ぐはてしなくあつてゐる。今せらる。

舟の騒ぐはてしなくあつてゐる。今せらる。

○舟の騒ぐはてしなくあつてゐる。今せらる。

今枚方(ヒラカタ)とよおの北より。○此舟の騒ぐはてしなくあつてゐる。今せらる。

○次に文に記す。

○此の世の... (text is partially obscured)

... (text continues vertically)

惟喬親王と云。文徳天皇第一皇子に子。母ハ従四位上紀  
静子正四位下名虎女なり。三代實録廿二。貞觀十四年  
七月廿一日の條に。已卯四品守彈正カキ惟喬親王寢疾  
頓出家為沙門カキ。紹運録。源氏系圖等と按るに。い  
つも貞觀十五年二月薨時年二十六歳とあり。云々

三代實録貞觀十六年九月廿一日の條に。丙午無品

惟喬親王益封而戸云々

坂本に無品とあるは四品の  
誤に貞觀十四年の條に四品と云

也

ハハ貞觀十五年に薨しぬと云うるを誤なり。大日本  
史に之實平九年二月薨時年五十四とあり。此の條に

之の條に之は貞觀十五年の條に云ふ。○カキ此の中にも其を

古今集伊勢物語と云ふ。之の句なり。セバとあり。其の  
云。之と云ふ。其の句なり。云々

... (text continues vertically)

○ 諸君の御覧の如きは、  
の抄本 諸君の御覧の如きは、  
の抄本

○ 諸君の御覧の如きは、  
の抄本

○ 諸君の御覧の如きは、  
の抄本

○ 諸君の御覧の如きは、  
の抄本

○ 諸君の御覧の如きは、  
の抄本





詩者志之所之在心為志發言為詩情動於中而形於  
言言之不足故嗟嘆之嗟嘆之不足故詠歌之云云と  
いへること也 ○宇土野、撰津志曰、島上郡鶺殿と云  
あつたなり。

○十のほろりあつてのほろりす  
のほろりすを舟をわたりて河を漕のほろりふこと也。

○十のほろりあつてやいぬかきこころのほろりほろり  
しほろりあつてよほろりあつてくろくろくはほろり  
とほろりあつてよほろりあつてくろくろくはほろり  
よほろりあつてよほろりあつてくろくろくはほろり

ともし、例の例の 横折と云ふことなり也古  
言通 今集によろほろりあつてくろくろくはほろり

國久世郡石清水大神也。朝野群載十六石清水八幡  
宮護國寺略記曰右行教俗姓 專為業修行久送多  
年兵而間恒時欲奉拜大菩薩也。爰以去貞觀元年  
參拜筑紫豐前國宇佐宮四月十五日參著彼宮一夏  
之間祇候宝前益轉誦大乘經至夜誦念真言密教  
六時不斷奉迴向三所大菩薩也九旬已了欲飯本  
都之間以七月十五日夜半於行教示仰宣吾深感志  
汝修善敢不可忍忘須近都移坐鎮護國家汝可祈

請者行教歡喜之淚滿眼瞻仰之懺殊倍即始自彼十五  
 五且昼夜片時奉祈請以同廿日京上八月廿三日  
 到末山崎離宮邊寄宿之間更倍信心祈願申云伏  
 蒙示現者同廿五日夜被示云吾移坐近却為鎮護  
 王城也者即攜何處可奉安置宝体願垂示現給  
 以即夜示宣可移坐之處石清水男山之峰也中畧  
 録上件由參上公家令奏聞焉爰以同九月十五日下午  
 勅使令實換点定參上次下宣旨木工寮令勘申御  
 殿六宇材木支度亦即以寮才允橋良基令造立六  
 宇宝殿 三宇正殿 三宇禮殿 已了奉安置三所御体了 下畧

案に行教の法師の父祖とも詳らざるに元亨釈書  
 十卷に新行教武内大臣之裔也居大安寺貞觀元年  
 詣豊之宇佐八幡神祠とやそ上に引群載の文と同  
 一やの事ありこそ八幡大神は男山に御守護の  
 為に御霊の移り坐するを例の法師の我通とするはせ  
 んとて偽り設て狂言タレコトをいひてあるらう  
 あるらう又この大神に菩薩と申す穢ケガレき事を  
 負し奉りしハ最澄のいたる事なり 最澄ハ世に云  
 傳教大師なり  
嵯徳天皇の神護景雲元年にせり  
 弘仁十三年六月寂りし年五十六 の僧の事につきてそ  
 道の為にいそまほきものなりとていひてやくあるらう

事やれいえい

○山崎のほりてゆうれきまのなかりあふくに相應寺の  
ほりていさばいせをさしめてはつてはふちのなり

山崎と山城國乙訓郡也。續紀卷三十八云延曆三年  
七月癸酉仰阿波讚岐伊予三國令造山崎橋。料材本印  
料作斷也水鏡。聖武天皇神龜三年行基菩薩山  
崎の橋とくくるといふゆへ。○相應寺ハ三代

實錄卷十三云貞觀八年十月廿日辛卯勅山城國乙  
訓郡相應寺者元是漁商比屋之地也。往年權僧正  
臺濱治水觀行橋頭遭天暑熱上岸スミ風涼有一老嫗

避舍獻地臺濱便在其中聊作壇法鑿平地中得  
舊佛像目錄相應靈瑞頻現。太政大臣歎其希有奏建  
道場即發工夫勿備輸遂定寺名以為相應。宣賜  
四履永為寺場。東至橋道南至河崖西至作山作異本  
北至大路作。次の文に車京作住へり  
にやるといふはさしめてはつてはふちのなり  
やうり

○この寺のまじりてはほりては押りてあつての押の  
うげの川とさうにうらまゐるなり。  
うらまゐるなり。

うきうき

さし波ハ小波にして、  
水うつす舟の多しと識  
多しといふあるとらふて  
ありとあやふきとるま  
あはれ

○十二のやま

天皇十一年十月堀離波江築茨田堤今山崎河  
通海是堀江也

集に山崎川を三田川と云ふ流は  
まののりといふとらふて  
まに依て紅葉に名細しき三田川と  
まののり

○十三のやま

よりのよは別とらふて

○十四のやま

いふら車にて京入るて  
いふら車にて京入るて  
いふら車にて京入るて

○十五のげつむらふまゝてきまけり。船のちつていづかひのち  
んのあまうつ。

きのふあつていづかにわたりてる事とていふ幸てはなす。

ちつていづて今俗にいふはなすこと。猶きといふ源氏

幕木にその年のいづかのついでにいふことあり。

又大物語に、とくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

さくさくさくさく。夫木抄ハ、いづかにいふことあり。

いづかにいふことあり。いづかにいふことあり。

いづかにいふことあり。

○このいづかにいふことあり。

のまゝにいふことあり。いづかにいふことあり。  
いづかにいふことあり。いづかにいふことあり。  
いづかにいふことあり。いづかにいふことあり。○あま  
あつていづかにいふことあり。いづかにいふことあり。  
○このあまのいづかにいふことあり。○いづかに  
古事記上巻に、詔虽直猶其惡態不止而轉。また下巻  
に宇多豆物云王子。萬葉集十二に、いづかにいふことあり。  
のまゝにいふことあり。またいづかにいふことあり。宇多豆物云花  
にあまのいづかにいふことあり。古今集春上といふことあり。  
まのと板のいづかにいふことあり。いづかにいふことあり。合て考ふ。









○ 昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、

○ 昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、

○ 昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、

昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、

○ 昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、

○ 昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、

○ 昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、  
昔の如くは、







